重修真書太閤記

四編九

へ13
459
39

へ13特
門 S
459
39

消 福井藩

重修眞書太閤記四篇巻之廿五

信長父子江北出張の事
并朝倉義景柳ケ瀬着陣の事

竹中半兵衛重治ハ日根野兄弟を伴ひ虎御前山より歸
る自分乃持口より入く様くのてゝ御邊等淺井家を
退去ある上ハ何方より身を寄らるとんも隨意ゝ成べけるを
も甲州の信玄死去あらしとたしかゝる上ハ若手の勝頼
ハたのゝ〳〵からゞ小田原の氏政も父氏康とハ武功劣りて
士を知ど
天正元年四月十二日信玄卒去勝頼廿八歳氏康ハ元

阿政會印

龜元年十月三日卒し氏政今年三十五歳上杉謙信
四十四歳
上杉謙信も四方小敵を受く牢人をかくまひ云西國より
赴き毛利家大友家なども頼みもとめ有付もとめけ
まどあまり小故郷遠くして齋藤の便宜もたゝやを
らひ當分の内爰小止りて某り一飯を分て時節をまち
まつとなりめしかハ日根野兄弟今ハそもかうも善よ計
らひまひてよ窮猿林小にる木を擇ふよ假あらぶと
やくともゆくへをと云小うう竹中さらバ爰小かくまを
居まつべしとて一間處をもつらひ兄弟を置けるバ日
根野兄弟ちゝく安心し時く出く虎御前山乃要

害縄張乃巧妙なることを感歎しける処へ木下藤吉郎不
意出来り兄弟を見て驚きし休ふて御邊は美濃の
日根野兄弟よあらぬやちの比浅井の許小居まつと
聞しよいろふしく此處よは来臨あらしるや何きて
も我方へ入来あきとて秀吉の役所へ同伴し上座小
もてめ丁寧よあしらひ四方山の雑談して様こふも
てあしもろハ日根野兄弟心中小おくそひけるハ何様大
量の秀吉小なむうしい織田殿の足軽あきどそ今ハ
虎御前横山長濱の三城小主として領知も多く一方の
侍大将あるその秀吉うるまくとかくあしらふこと
さてもく武士の道をとく心得しそのるる浅井長政

の取扱とハ抜群相違のもてなしなり我こむすめ一
城の主なるら今日ハ流浪の窮人なりかゝるのあらひ
もこゝろ分よ過たりと思ふらう何とふく水下をた
のそきそのよわもひ此人の下すて花くしく軍
一名を萬代ふ止めぐやるゝと取かへしていはそふある
へしそのち秀吉酒を贈り食をもらいよく厚く交
をりけるふらう日根野兄弟浅井ゞ家の滅ぶべき兆あ
ることを語り出し諸侍たちの心中きらくふして忠
義を思ふそのもそのの心を遂ることあさいび久政長政
乃心合ぜ長政ゞらしといふこと極めてうけもども久政
こゝをうけがそた然らば江北へ取かけるゝ共そかぐし

く稼ぐ者ゆまじあるど云けるをもとべて岐阜へ注進した
りしかば心そやき信長大よ悦び八月八日の夜俄よ陣
觸ありて信忠を同道ふし翌日虎御前山ふ着ゆよ諸
軍勢ハ追こふ馳集り雲霞の如く横山らりこのうた三
四里の間ハ野も山も旌さしそのくるびゝぬ処いふりけり
信長虎御前山ふ入御のち日根野兄弟を召出し對面
ありく珎しや備中守弥次右衛門尉濃州退去のち越
前ふあるかと聞つるふ古の程ハ竹中と同寓あるう但
この程領知ふく物ごと不如意ゆるゞし今少し早く知り
たらハ別よ用意もそべけきど當城よ着しく初て御
邊兄弟乃ことを聞知たまばその甲斐ふし何とふく持

きたりし物ゐまでども此際の事闕しろとく太刀
刀鎧小袖馬鞍取そろへて日根野兄弟ゐ與えらまし、
兄弟まことに思ひもらくらぬ悦ぶ〳〵ちよ故もふく過分
の品こ賜ゐりゆと世ゐ有難き大将軍かゐ我〳〵かく
宇人まく罷在ゆへ共近日御出陣の時何方ゐるも一方
を仰付らるべくいむりしい一手の兵士を引廻して軍乃
まねをいたしいっともゆひきと望うゆけまい信長大よ
悦ぶせゐひ御身兄弟の軍ぶりハ度こ見きしそのへ然
るゐ我味方として働かるべきこと悦びの中の悦ゐりと
宣ひけまバ日根野兄弟病所ゐかつり信長心おごりて
士をあふどろとのこ聞しよ今日の容体の閑雅て武士

をあしらふことの重こしさ誰ゐ此大将の馬の前よ命
を捨んと拓もをざるへきと譚り合慶へ信長の本陣よ
り白米十石積送り兵粮の料ゐと云越たり日根野兄
弟まとつく驚き木下といひ大将といひいりゐまびか
くの如くゐるすやおまとに栄ゐる國のもるしゐ
るべしして主従の約をバゐふさねども既よ君臣乃礼よ
りも猶厚く拓をひそめしとゐり偖も織田家の軍勢
追おひよ到着しての勢まへくよ十倍して盛ゐりける
ゐゐり浅井家の輩肝をひやしし仰天してぞ居たりける
小谷の近慶月ヶ瀬の城主町野若狭守小勢ゐて守るが
なく拓もい頻よ加勢を乞けまども長政久政軍乃評

義決着きゞ隙取て守明ざるふゝり月ヶ瀬の城も
あらへるゝその夜の中ゝ城を開き小谷へつゞくこけり信
長この体を見ゐさていい道筋心安ゝ朝倉勢追こく着
陣をべけしれば急ぎ此方ゝても人數配りを定むべゝとて
夫こ備立を下知きいれ大岳の北小山田村ゝ先勢を操入
朝倉乃加勢の通路を裁切んとて柴田修理亮木下藤吉
郎を両大将とゝ阿閉淡路守淺井新八郎多賀新左
衛門山崎源太左衛門等を案内者とゝく差添ら也翌
日ゝ信長ゝも出張あり偖も淺井長政ハ信長京都ゝ
うの歸り足ゝ定めて小谷へ寄るゝらんとゝくそしゝかの
ハ兼て使者を越前ゝ遣せ義景の出馬を請ゆさ

れしかともその比江州西池田子左近兵衛氏久ゝ義
景へ注進しけるゝ信長京ゝ直に越前へ乱入乃ゝ
たしかゝ承るゝゆとゆゝ義景大軍を發し敦賀
まで出張の節若州表ゝく働き軍馬の疲勞少ゐから
びゆへハ今ゝもぞらく休息仕度とゝて辞しけるゝぞ其
外ゝい然るべき輩もゝけまバ義景も詮ゝくゝく小谷
落城ゝ及ゞく後悔をともその甲斐あるべゝらゞゝく國
中の諸士を伴ゝ三萬餘騎ゝ敦賀まで出張き
かとも其間ゝゝや信長ハ岐阜へ歸らをゐつるゝゝ
義景本意ゝく知ゐゝ敦賀ゝ少時逗留ゝ東
西の容子を聞合を居られゝ江州ゝ阿閉淺見ゝ叛心

の容子日根野兄弟ゞ淺井七郎を討て立退月ヶ瀬乃城も開渡し信長あたゞび虎御前山へ出張しつる由長政よりを注進櫛のゝを引ゞ如く敵ゞいまゞ備立乃定まらざるうちよ出馬あるべき由申けるかゝるを義景もさらバ打立ゝの共とく八月九日敦賀を進發し北江州柳ヶ瀬村へ出張を然るに家老ども義景を諫めける樣信長此度の出馬ハ是まてと事かろう田天の威を振ひ軍勢の猛烈形ると日頃よ倍きりその上よ江北の諸侍をい く旗本ゝ集てたきハ案内ハらく知たらん等閑の軍して勝利を得んこと難かるべし江北の地ハ柳ヶ瀬をはじめ何きも要害乃処よあらびもし一戰しく利を失ひるハ味方大敗ゝ及びて立直をべき術なるべしさまゞは敦賀の城を要害ゝして敵を待請合戰あるべし小谷ハ多年能ゝしくたる城なる長政まゝ世よ許さまたる良將なれバ後詰ふく共たやもく落城よ及べからに と樣ゝゝ制しけ共朝倉滅亡をべき時節すや義景こきを用ひゞ眼前ゝ信長小谷を責落さんとるゝと見あゞらう後詰きゞハ長くゝ弓箭の道を失ひ武士の名をくだをべしそのの上長政もきりよ頼ゝ越る者もまゝ擄なしとく終ゝ柳ヶ瀬村へ着陣を山崎長門守吉家こあらしを聞大よ愁傷し日頃殿の出陣ハおとたり勝るゝゝ此度の出陣いらやく殊よ柳ヶ瀬村へ着陣ハ別し

て然るべからず當家乃存亡此一舉ふあて軍ハ多分十
又八九分ハ淺井敗軍をべく淺井敗軍をバ當家もまさ
その跡ふ付て敗北をべきあり織田家江北乃案内を知
く虎御前横山の要害又ハ宮部日根野等の
名士を降したまハ江北乃骨目既ふ織田家乃者とあり
たり勝利を得んと必定きり去とく今更何とせん
行るゝ処まで行やゝの共として手勢を引具し相備の河
合安藝守と共ふ若州の三方表を引拂い柳ヶ瀬ま馳付
て義景と一處ま会へたりさまども士卒等の氣を
おくらかして詮なしとて勝敗のことハ更ふいそぐあく
まで十日義景大岳後詰のため柳ヶ瀬を立く田神山へ

陣をそうを胴勢ハ地蔵山をそうひ餘吾の庄木の本邊ま
透まふく陣を取織田方ふてハ稲葉伊豫入道一徹齋を
づふ千余人を以て高月郷へおし出し備を立て朝倉
ゲ三萬余騎をまつ大膽不敵と見へたりけり義景あれ
とバ見ぬふりして大岳の要害を丈夫ふ構へ越前方乃
侍大將齋藤刑部少輔小林彦右衛門尉豊原寺の西方院
をはじめ多勢を込置二の曲輪ふハ淺井家ゝ井口越
前守千田采女正を込置三の曲輪焼尾と云處まは淺見
對馬守を籠て防禦の用意嚴重ま備えたり偖又その
ちゝきハとゝ町野の城ふハけゝめゝ越前の番手の
大將中島惣左衛門尉平泉寺の衆徒玉泉院聖光院を

朝井朝倉軍勢十万人　信長四万人

先とて五百余人を籠賤ヶ岳の城ハ最前より浅井家の東野左馬助西山丹右衛門尉西野太郎右衛門尉を籠らまけるゝ小勢ゆゑ難義たるべしとて越前の朝倉土佐守堀江甚助を添らまける處へ義景出馬あらしけまハ久政長政大ハカを得織田勢と對陣ありけるを

前波九郎兵衛尉淺見對馬守を説事

并大岳町野落城の事

朝倉左衛門督義景田神山へ陣を取大岳を丈夫へ守らを淺井父子と志を一つゝして信長と對陣を織田勢ハ五萬余騎朝倉淺井両家の軍勢四萬六千餘騎あるとに對ゝの軍ふまけども織田方の士ハ度々の戰ゆゑ鑛をあらハしたる壯士あるゆゑ侍大將いづれも所々の軍へ調練して機發を知の術ゆゑ熟きゝ朝倉淺井の勢ハ士も大將も我國乃ゆゑ合して終へ他國の軍ゆゑ馳どその上へ味方の侍多く織田方へ降參きゝゆゑ氣臆まけたり木下藤吉郎つくゝと軍の勝敗を考るへこの勢を以て相互へ軍して勝利を得んとハ疑ひるけまども味方も若干討るべしいふもして味方を損きゝ大岳の要害を落さんと思ひ立けるゆゑ先達て降參きゝ越前乃前波九郎兵衛吉継を招きけるハ貴方味方へありて忠誠を竭したまへども一分へての働きを顯そゝ度朝倉淺井かゆゑに對陣るゝ共へとも實ハ両家滅亡

乃時節到来せうもの時貴方らく心得あよて一分の功を立るべーと心付けるよりて前波大よ悦び熟ゑ
えへハ大岳の三の曲輪焼尾乃大將淺見對馬守と前波
び妹壻なるべ同十二日の夜吉繼一人ひそよ焼尾の曲輪
よいたり對馬守よ對面ー今度の軍ハ朝倉淺井滅亡
乃時と知きたり然る小御邊此焼尾よ籠て何とそて
運を開きるべきやと所ハ對馬守も淺井滅亡遠から
ずとハ存ぜども人あらに如斯その日その日を送る
乃ことやしうう前波織田方へ降参ありて家名を相續
ふしるへと勸めしハ淺見一議も及ばず同心るー此
曲輪の侍ハ大形淺井家の衆るきハまづ捨置誥の丸乃

越前衆をかさらんとそく淺見よ案内させ齋藤刑部少
輔小林彦右衛門尉豊原寺の西方院等よ對面ー淺見
對馬守ハ時の機を察ー織田方へ一味ーたら名こも朝倉
普代重恩乃侍るもあらび殊よ西方院主ハ師壇の好の
捨がさに出陣ふしるへともうふを慈悲滿行ゑ
菩薩形の御身よて邪見放逸の甲冑を着ー强欲熾盛
乃兵杖をとりて修羅の衢小迷ゑもあること上ハ佛祖乃
智見を恐ま下ハ法流の斷絶を思ひるふべー大厦乃倒
れんとする一木の支ある処よあらぼとそよとありたと
ひ此大岳をぞふ能守りたらんよハ朝倉の家安穏るべ
く淺井も運を開んとらば如何樣よもしく防ぎ

まふべし第一朝倉殿累代の富よまかせ淫樂よ長ドゑ
ひ百姓をを塵芥のごとく扱そいま郎等をハ土木ゑうも
猶輕くあしらひまふまうり民ハ君をいたぐうをを士ハ君
を慕まふ罪ゑき我等ゑ父祖の功を思ひまいはは止
ことを得ぬ住ふまじ國を立のき他國小流浪しくゆ
各もうゑく思案ふしまへ功ありとも重賞ハふく戰勝
ぬハ顯罰あらんゑど語り出しかハ齋藤小林も西方院
もまゑや前波よ同心して面々の本領を安堵をやとれ
まふ心つきしふうり聲をひそめてうきくもりおて
うり今度の軍利あるべしとハ思ひ只一日くと此處を
守るゑふして勝利を得んとハ盲龜の浮木よ逢優

曇花の開を待うり猶りうるべし去とて織田家よ所
縁もるしかまひよ降參しを却て面縛乃辱を受鉄
鉞の誅を免うまざるとロ惜かるべし如何よをバ御身乃
如く安穩ゑるべきぞと裏問ハ吉繼うらうゑづき各を
安穩ふりめんと思ひ何とて敵陣へ尋ね来るべき
我よ一つの計あり今宵某と淺見對州と二人の勢を以
て二の曲輪を攻べしその時をのく後詰の体すて打出ま
つて共ようまを責ゑつて淺井方の井口千田もあらくを逃
出しを燒尾ハとでよ織田家の人數を入替たまをバやゑく
進ぐ久政長政の居処を取切へし次よ二の曲輪を乘取う
げいて誥の丸を責べし各ゑぐ支えく羨を引退き

田神山へ赴き義景ふ敦賀へ引退て堅く守りゐんと勸め玉へ然ば各く義景乃咎を受るこゝろふく織田家への大忠とゐふべしといへばいづれも大ゐ悦びそれ〳〵を行ひ玉へと勇ふりう前波急きゝて歸る木下ゐゆく と告しかば秀吉さらば時刻を移さふ及びゝゝく富田弥六郎毛谷猪之助増井甚内以下を差添又腹心乃郎等五百餘騎を以て燒尾の丸を請取を夫より直ゐ二の曲輪ゐ責掛りうそゝゝもんで戰へば此丸の大將井口越前守千田采女正隨分らく軍しけゐども只今まで味方ゐあ〳〵三の曲輪の者共いつ〳〵か寄手と一ッゐりう却く二の曲輪を攻ゐりう井口千田必死ゐりく防げる処へ詰の丸の越前勢押来るを見く後詰ゐりうと大ゐ悦びけりゐさへふくて三の曲輪の淺見と一手ふ形りく井口千田ふ向へハ井口千田ハ仰天し如法深夜のこゝろう誤く人さゞひりと声りけて戰へども寄手いゐく機ゐのいて手いたく責しかば井口千田防ぎりゐ詰乃丸へ引入んとするに寄手嚴敷ゐりたてく責けゐば詰の丸へ入かゐりらくして久政の手へつゞけるかゐ〳〵後ハ前波淺見ゐ輩詰の丸へ攻かゝりけるゐ元ゝう云合きゝことゐれハ齋藤小林西方院防ぎかねし休まて城を出義景の本陣へはゝり入ゐ淺井ゐ第一ゐたのゝ切たる大岳の要害たゞ一夜のうちに落たりしかハ木下大ふ悦び夫

ゝ前波等とハ休息させ信長の本陣へ町野の要害を攻取べしと注進しけるハ信長木下が功を賞し不破河内守同彦三郎塚本小大膳同三郎兵衛と大岳の番手として入置十三日の早天ゝ前波冨田毛谷増井淺見對馬同大學阿閉父子もゞく降參の諸將を案内者として町野の要害へ攻掛けゝ此處ゝを僅五百餘人にて籠りたると越前勢心ゝ加勢に差加へ共寄手目に餘る大軍と云且を案内者いゝふ防ぐ共あるべくハ見へざりけるゝ中島前波よりついて城を渡し可ヤ間一命を助ゐゝと請けるハ木下之を許乃城を受取木下が勢と入たるハ中島以下の越前勢田神山へ退去て今ハ小谷一城のみ有けり

重修真書太閤記四編卷之廿五終

重修真書太閤記四編卷之廿六

義景田神山對陣の事 并佐久間右衛門尉信盛荒言の事

木下藤吉郎秀吉神妙不思議の秘計ゝ前波九郎兵衛大岳の淺見對馬守を降し誥の丸の越前勢齋藤小林西方院等を帰伏させ終ゝ大岳の要害を落し勢ゝ乘て町野の城を落しけるゝ織田家の軍勢もいふく勇ミ信長ゝも悦喜やきうゝく此方ゝ軍を始め朝倉と有無の一戦をあそべきゝと宣へゝ木下藤吉郎本陣ゝ至ゝ容ゝ信長ゝ言上

しけるに今日一日合戰を止らるゝ見合をまつて必定今夜義景田神山を引拂ひゆべし引拂ふ節ハ臨て追打の御用意あるべく存ゆ殿ハも兵粮をべく御用意充の御事ハ奉存い退くゝと撃い十倍の利あるものゝよて越前へ付入ハも相成ゆへくいゆ川大岳の諸の丸と守ういひ〳〵齋藤小林西方院等ハゆ含め〳〵事のゆへに義景ハるゝひその儀と用ひゆべ〳〵さてたゝハ越前の軍兵共大岳町野の落城ハ臆病氣と起して退心の付たらんハ勸むるものゝゆ〳〵誰うらいるゝゆべきそゆ〳〵追打の御支度肝要ハいと

馬場信意北陸七國志ハ天正元年七月十七日義景一乘谷を立十八日敦賀ハ着陣八月六日江州栁ケ瀬村へ出張十日田神山へ陣を替けるハ其夜大岳の城へ雷落城中の小屋燃上ゝと以て織田方ハう急ハ攻けるに大岳たちまち落城をされ共風雨くけしき故義景の陣ハてらしを知ぞ十一日町野城落けるハう十二日夜義景田神山の陣を燒て越前へ引取といつゝゆけとい信長殊のタハ喜ぶをゆ能も計ゝを

のかゝ大岳といハ町野とのひゝとを攻取ハ味方乃兵士を勞とび降參の兵士をうゝと働うをゝと

秀吉の日頃得てたる術とい云るゝ奇代の侍か
あゝと感心あゝて即時に先手後陣の手配あゝ今宵
越前勢退去あるべゝその時とゝやうに打て出追
討をべゝ後をて軍ふちつるゝを進て味方ゝるゝ
あゝあとゝまうゝ下知ゝて待ゝとゝう权又齋藤小
林西方院の三人い大岳の城ゝ田神山の本陣ゝ
いゝう義景へゝけるゝ我々三人隨分おとゝたゝう
く防戰仕ういへとゝも燒尾の曲輪と預うたる淺見
對馬守敵方へ降參ゝ夜前ゝう織田勢とおのゝと
持口へ引入淺井父子の居城の通路と裁切てゝる
らさいあいゝ二曲輪の者とも差と專途と防さい

ゝゝも甚危ふく見へけるゝよう我々後詰とゝて
罷向ひいゝ処井口千田打負淺井の陣へ迯入いゝそん
こ萌ゝ立いゝへゝ我等詰の丸を大切と存引返しい
処風雨ゝけゝゝゝその上越前勢のうちゝ前波冨田
一味のゝその有て詰の丸ゝも火とゝけいゝへゝ我等
詰の丸へ入いゝとかゝゝ敵の勢格ゝゝ猛烈追掛
ゝいゝ故此御陣へ直ゝ取掛ゝべく存いて御注進の
たゝめ參上仕いゝ御覽の如く大岳の要害燒打ゝ逢い
ゝい信長勝ゝのゝて當御陣へ責かゝゝいゝんゝと
必定ゝいゝ當御陣の体柵あんゝともゝゝゝて要害
あさまゝいゝゝゝて勝かゝゝたる大軍と引うけ

らもとんと御思案なさよ似こういくんや今度い御
自分の軍ようてもるゝ浅井加勢の御たゝめゝ無分別
の軍をるさらもとんと近頃口惜く奉存ゝ早く御
用意あうてこの風雨よ紛も當御陣を御引拂ひ敦
賀津ふて御防戦可然奉存ゝと勧めけもい何もも
此議万全の策ふるゝと評定一決しけるうへ軍
中そゝて大岳町野の落城ゝ氣を臆らゝ踏止う
て戦くんとゝふゝの一人もゝく落支度のらゝて
上を下へと騒動をされとも義景心決ををいう
せんと猶豫をゝ処へ中島惣左衛門尉とゝゝめ町
野の要害よゝゝうゝ者共くゝゝゝつと來う織田勢の猛

さと火の如くその神速と風の如くと恐もく語と
ゝうゝ義景もあさもくてさゝい引退くべゝとい
ふようくゝゝ諸軍勢我先にあをうけるふそ山
崎長門守河合安藝守陣々を馳廻て騒動と静め差
圖を待ぞゝて陣を拂ひゝゝのゝゝ其答あるべゝ
と嚴重ゝ觸たうけるゝよう漸ゝゝゝうけうさ
て夜ゝ入ゝうゝ山崎河合下知ゝて諸陣ゝ篝火と
たうを堅く守る体を見もべゝと云ども元ゝう臆
病神ゝむうれゝとるもい夜ゝ入やいふくゝやぬけ
ぬけふ落去て陣くまそゝなゝゝゝゝゝ義景もせ
んゝゝるく夜半ぞうゝ本陣へ火をゝけ拝ケ瀬

表へ引たゝけり

田神山い木の本の驛のゝつと乃丸を山と云よ

りより柳ヶ瀬まで今道二里田神山より小谷へ二里半之

此時齋藤小林西方院三人より木下ゝ許へ申くと

知をゝゝゝ秀吉本陣より注進を信長ハ胥より田神

山を目も放たゝを見ゝうて居ゝゝゝ山上処くよう

出火ゝて燒立けるを御覽あうてゝゝゝや朝倉引拂

ふゝうん早打立と下知ゝゝゝふ処へ秀吉よりも

注進有けるゝより信長真先より馬を出ゝゝふゝよぞ

柴田勝家佐久間信盛丹羽長秀明智光秀池田信輝

稲葉一鉄氏家左京亮蜂谷頼隆長田刑部少輔蒲生

右兵衛大夫同忠三郎阿閉淡路守同万五郎近藤山

城守多賀新左衛門尉久徳右近大夫ゝ輩大ゝ狼狽

しゝゝ後もゝゝと馳ゝゝけゝ但此面ゝ木下ゝ今雪

朝倉退陣と告ゝゝを信とゝゝ例の秀吉ゝゝゝ出口

そ此風雨ゝ何ゝゝそ敵の引べきやと心ゝ許ゝて

左のゝ支度もせざゝゝゝゝゝゝ大将打出ゝふと聞

て止ゝを得ゝ打立ゝゝゝい地藏山のあゝゝゝて漸

信長の旗本ゝ追付ゝゝその時信長ふゝ返ゝ續く

ゝ誰と問ゝゝ柴田丹羽明智佐久間蜂谷と銘く

ゝ名乘ゝけるを聞食胥のゝとゝゝゝ渡ゝゝふゝ

何とて遲ゝゝそ其方共ゝ似合ゝゝゝゝと怒聲

ふ叱らるとていつまも赤面し御馬ひや御先より加て
をけるゝ佐久間右衛門尉信盛つゝぬ体して左様
に御勘當畏入てゆへとも某等をとの侍多く得難
くゆべくと申けるゝよう信長いよく氣色を損し
其方左様ゝ男ゝを自賛ゝをとも其方ゝとて勝
べき軍ゝ負ゝさ〳〵片腹痛き荒言ゝかそれいくん
より前へ進とて相應ゝ稼ゝと宜ゝふゝそ信盛も辭
ゝ先陣ゝ加くらんと進こゆく信長佐久間ゝこと
の言葉をふゝく悪こゝみひしとく然るゝ信長の勢
より一際前ゝ進むのゝあるを見ゝひ誰ゝくらんと
いぶゝ〳〵ゝあゝめさと馬を早めて追付何者ぞ

と尋ゝ孫ゝ〳〵ゝ前田又左衛門佐々内藏助福富平左
衛門尉戸田半右衛門高木佐吉湯浅甚助赤尾七郎
左衛門下方左近岡田助右衛門と名乗ゝふゝとを御
觸と守ゝて一番ゝ馳出しのゝとを信長大いに
御感あゝ今夜の先陣ゝ我より先ゝあるゝまゝとお
ゝめゝたゝるゝ其方たちゝ越とゝとの残念やい
とけくと下知ゝゝゝへゝゝゝ何もまゝと馳たゝける
ゝゝゝゝ爰ゝゝ越前へ行道二筋あゝ中河内路と
引田口なゝ何とゝ付て追行んとゝつとを猶豫ゝ
したゝけゝ
押ゝ瀬ゝゝ椿市へ一里椿市ゝゝ中河内へ一里

十九丁中河内か板鳥へ三里六丁道峻岨中河内の驛のくつを上う坂左よ敦賀道あり又栁ケ瀬乃關を越て右よ行い越前の本街道こ左い敦賀道也十八町上をち刀根坂峠あり梁ケ瀬より疋田へ三里疋田より敦賀へ二里

木下藤吉郎大音よ中河内へ落しい越前の歩武者そ疋田へ落るい大将くゝめ歴々あうあと退去の作法るうそ上疋田敦賀い朝倉のたのむ処の要害なう此方よ相違あゝゞと進む処へ齋藤小林か許より中河内へ大勢と落しやうて義景の旗本と見を疋田へ恐ひて義景くゝめ大将分小勢よて

落ていと注進をけるふより刀根坂くゝて追てゆく

刀根坂合戰の事
并山崎長門守父子戰死の事

去程よ朝倉左衛門督義景を八月十三日夜子刻よ田神山の陣を拂ひ敦賀をさゝて退けるか風雨くけしく路次ものとよ難澁あゝしかとよ栁ケ瀬村よて一息繼て人数を引分大勢とを中河内路へ退を我身い疋田口をさゝて落らをけるよ敵の大勢をてよ近付たうと云よ驚き疲を切るる勢よてをあをいつをもあるれて居たうけるを山崎長門守よ

ことを勵し中も詮なさとるうゝよりゝあさ浅井より頼まれさをあひ御思慮もなく當國まで御出張のとゆへもゝ口惜く存ぜ去とて敵を近つけたうえの上より彼ハ大軍なり道とてを道をまゝゝハ爰を吉家父子請取て中君より一刻もゝやく敦賀へ御引あつて防戦の御用意肝要ハい夜も既より深ぬべゝ急うをあへと勧めゝゝゝとも義景聞入ゑそび長門守ゝとゝや討死とあめひ定めゝゝよるか某も其方と共より爰より戦死ゝ主従の恩義を厚くゝゝめりた武士の意地と立べゝとて更より動さゑるゝねた朝倉掃部助景氏様くゝいさめ何の道ゝも道をゑふべさ

にゝるふけとゝも累代越前の守護職ゝて北陸道より威と振ひゑひゝ御身の野徑の露と消させゑて人と末代までの恥辱ゑるうゝやく御居城より還入まゝ浦ゝ御心静御腹めさとハべゝと強て馬ようさのを口と取跡をもゝゝ見び馳らをたゝ義景の後影の松明も次第より見へびるゝゝゝい今を心安ゝとて朝倉掃部助同土佐守山崎と一緒よるうて敵とまり心の中おゝゝゝらをてあるれるう長門守嫡子小次郎吉次を見かへゝ

古郷より今夜ゝゝの命ゝも知てや人の我をまつらん

と菊地寂阿の詠けんも我身の上よりよく似たゝこと

いへゝ杣山の河合安藝守宗清取あへば
古もかくるたゝーと菊川の同〜流とゝ身とゝ沉
めん
といひける人もあうとさくと云て打笑ふ然るゝ
織田家の大軍ゝゝ刀根坂の麓ゝてあ〜寄て鯨波
とつくゝとゝその聲山谷ゝ響き合てあひたゝ〜前
田又左衛門尉佐々内藏助下方戸田真先ゝそゝんて
坂を上ゝとゝ山崎父子朝倉掃部助同土佐守山崎七
郎左衛門尉吉延同弟肥前守吉健同御長九同珠寶
和田三郎左衛門尉義成同清左衛門尉義繼鰐淵將
監吉廣壁田圖書吉澄同七郎兵衛尉吉房神波九郎

兵衛尉吉久田尻十郎左衛門尉秀勝西島彦五郎吉
尚山内彌六左衛門尉岩崎宗左衛門尉清水三郎左
衛門尉増井五郎左衛門尉禾田惣兵衛尉宗俊三段
崎六郎鳥井與七郎以下必死の壯士五十餘人さ〜
のゝ嶮〜さ刀根坂の坂乃上ゝ備ゝと立てまちかけ
たゝとゝ織田勢多けゝとゝも坂道細く〜てゝつうゝ
三四人りく打ゝゝ攻上る山崎父子坂三分ゝ下
立て嚴〜く切かゝゝけるゝとゝ織田勢多く坂中
ようまゝう落され我太刀ゝつうぬゝゝ疵ゝ蒙ふ
その其かぞあうりゝとゝも大勢ゝゝとゝ入替〜責立
けるゝぞ山崎父子兄弟今ゝ限ゝと輪寶の山ゝ崩

を勢ひて坂を下りつつ上り働きけるとい織田家の先手散々に切るひけられけるを見て前田又左衛門尉佐々内藏助福富平左衛門尉湯淺甚助おそ口おし〳〵爰にて加様に隙取ていい義景に追付べき越前國へ入立ては彼家累代の國ゐく軍をこゝろる難義ゐるべし〳〵敵い引足の疲と武者ゐく猛し共くつゝに五六十騎を我に續けや若者こもと呼くく上りけるとも坂中の道泥ふゝくいとべくけるゐゝ坂中よういつも〳〵追落さるとて味方勝利を得ど然いとべき様あらとて佐々内藏助ゐ手の足輕二百餘人と先にたて鉄炮とゝめゐく〳〵打をしゐい山崎ゐ手の者打ゐしまるれ少し後にて見へたりけゐ跡に扣え〳〵和田鰐淵神波山内増井三段崎清水西島入替ゐく〳〵責たゝ〳〵山崎父子いゐくゝまて暇どゐゐちに義景敦賀にそのびにゐ〳〵味方いくつゐに五十餘人ゐつべき軍にあ〳〵ぬとい兼て存知のとゐもとも大勢をゐゐ〳〵ゐゐ〳〵逗めんゐたゐ命をたゞふてゐをくべ〳〵互にゐけまゐいさめ合をゐ間もゐく戰ひ〳〵ゐとも雨の如くゐゐい鉄炮に打るゐやまさと色めく処とこをほ〳〵前田又左衛門尉佐々内藏助ゐゐ鎗と入にと云にゐゐ坂と上り利家い鰐淵將監と鎗と合をゐち〳〵突合けるに利家ゐ鎗前いゐいまなんとの如くゐるゐ〳〵將監い霄にゐの戰に疲と終に突まけ後居に倒とけると起〳〵もなくゝ利家のゐゐくと首を取てゐ〳〵上追打の一番首と呼ゐと

そこの時佐々内蔵助い和田三郎左衛門尉と戦ひ居けるゆ前田の名乗るを聞て大よをきたち獅子奮迅の勢とゆ〳〵おめい〳〵飛うゝて和田を切伏首を取て立上り無二無三よ攻のゝる朝倉勢おめ〳〵颯と引退しい前田佐々得らうと坂を越て廣道よ至る朝倉勢敵よ切處とおされていけら〳〵と山崎らゝめ打残されし者とも一手よそゆへ火水ふるうて戦へとも織田方大勢るとい次弟よ切勝朝倉勢い打負たうされ共とても〳〵とても生てゆへくべくあのてゆら百騎ゝ十騎十騎ゝ一騎ふなる迫めと踏止ゝ〳〵討死し〳〵けるうちふ山崎父子以下五十餘人一人も残らず死し〳〵たうけう織田勢い義景よ追付んとおのへら刀根坂の上よ切捨て道を急さ

けるふ山崎ゝ手の者の打めらさるとし〳〵その共道を遮てちとも通さじ〳〵木下柴田佐久間明智丹羽蜂谷塙九郎左衛門尉近藤山城守氏家左京亮稲葉一徹齋蒲生右兵衛大夫同忠三郎氏郷山岡美作守同對馬守阿閉淡路守同万五郎永原筑前守永田刑部少輔等段々よ押来う刀根坂乃上よ臨めい木下藤吉郎立あうう此峠よてゆゆとよ隙入て何ゝ義景よ追付べきその上よ義景敦賀よ籠ゝ防戦の用意ゝ〳〵のひるゝ要害いう〳〵容易よ攻おとしとうるふよ〳〵爰の勢ともらそのまゝ打ちそゝ押行べ〳〵と下知し〳〵けるとい前田も佐々も尤と同意し〳〵むゝふのゝとゝ突倒し〳〵駈倒し〳〵飛ゝ如くよ追駈けるとい氏家左京亮これ

と見て木下ふまらるかり〳〵け者どもとて鞭と鐙ふ合
とて馳たくけゝ
刀根坂峠近江越前の國堺二十四町下ゝて刀根
村あり北陸道七國志ふ山崎長門守吉家父子兄
弟和田鰐淵壁田神波田尻西島山内岩崎清水増
井禾田三段崎鳥井等疋田ゝての間ふて返〳〵合
返〳〵合五六度の合戰ふ追々討ゝて〳〵と云ゝ然ゝて
とも今刀根坂の上と山崎長門守父子討死と云
傳ふ

重修真書太閤記四編卷之廿六終

重修真書太閤記四編卷之廿七

齋藤龍奥王從討死の事
并日根野兄弟愁歎の事

山崎長門守吉家父子を始め必死の侍五十餘人踏
止ゝて防戰〳〵けるふよって朝倉義景わう〳〵遁ゝて明
方ふ漸木目峠へ退たくけゝ
木目峠ら越前南條郡ふあり和歌者流越の中山
と云敦賀郡新保驛より二屋驛ゝて一里半の間
ふて上坂廿四町と云峠より北八町上ゝて鉢
伏山あうゝと印牧丹後守の城趾ふり但義景疋

田より敦賀へ入敦賀より木目峠へ來りしかるべく然るとも諸本らふ木目より敦賀へ入といふ因く姑くこれに從ふ

さてこれを山崎長門守以下五十餘人刀根坂峠にて戰死し織田家の軍勢をいくへに寄來るとも夜中遠路を押て道くの合戰に勞ぬるとも暫く人馬の息を休めそれより又追掛ける中に木下藤吉郎が一手味方を駈ぬけ真先に進みけるに刀根坂を越て横雲のくられ行間より見渡せば馬をとめて朝倉三郎景紹同掃部助景氏同孫三郎景健同土佐守景行同彌四郎河合安藝守宗清朝倉權守道景詫美越前守行也一色治部大輔神波宮内助溝江左京亮久保田將監中村五郎右衛門尉同三郎兵衛尉同新兵衛尉小泉四郎左衛門尉青木隼人細呂木治部丞伊藤九郎兵衛尉疋田六郎三郎長崎大乘坊以下五百餘人義景に追付んと打けるを見たけ聲聲ふそとへ逃るを越前勢ハ我くと追手にうけ何處まてのびんとて左樣に道を急うるにやあるしふても敵に後を見せてはなら長き弓矢の瑕あるをのを返して尋常に軍しかへ呼とりつけて追たうしうを越前勢馬の頭を立直し何とて敵に後を見せをべきぞ其處ふのきそと聲うけて五百餘人お

めいて返さい木下の手より加藤虎之助福島市松
片桐助作堀尾茂助中村孫平次蜂須賀神子田の面
面一騎當千の勇士あるとは我先よと馳向ひ鑓を合
さて働きこゝに朝倉方より河合安藝守と名乗て福
島市松に向ひ鎗を合をるこゝ突合ける内安藝守
も古兵にして透間のぞくの上手なり福島い幼弱か
ゝと共不敵の曲者あれい一まもせず戰ふて更に
勝負い見へさうけるか河合も長途に疲れて上泥
途にとぐらして膝をつけ福島をうるに付入て突
伏終に首を取たりけるを加藤虎之助これを見て口
惜や福島に突負たりいざ首取てと進みけるを即

等あるける木村又藏かゝる制如斯亂軍にて雑
兵の首を取何うとん能武士を擇み打ようとも
いやと勧むるとうちうかゝけ敵中
と走廻り詭美越前守とこゝたるゝ面と合をたり
ゝとい元平泉寺の衆徒あるけるゝ力量あるて武
藝を好こゝにゝ還俗したりけるを朝倉にゝ用
ひゝ越前の奉行とゝたるゝ今度の軍難義か
ゝを知て山崎と共に踏止り刀根坂にても相應に
働きるゝ義景に近侍のめゝ手負て退こゝし
を助け退をてたゝ今取て返しける処あり何うも
をこゝをためらふ血に染たる大刀を打

ふ〳〵切て廻り木下ろ侍二三人とそこう合ふ
をを切伏猶も勇んてふるまひけるを加藤虎之助
そる廻ふ見付ふをとらを越前の詑美越前守名ある侍
ぞ我討取〳〵高名ふとそんと馬をうけ寄突て廻ふ
詑美ふりうと打笑ひ戦場ふれぞうを孫ふてそ
〳〵ふ者こ鎗を合そるとのうこてけと木下ろ手ふ
て何めのぞ生捕て越前へ連行取立〳〵軍さをんと
呼そう〳〵突合けるか廻虎之助ろ鎗の上段下段をき
まふけをとろ越前守心中ふふかどの年まて天晴剛の
者や行先たのの〳〵ふ若めのうなとおめ〳〵ふあ〳〵
らひあしらを戦ひけるか廻越前守ふ宵ふろ度この

戦ふつうをかりい少年と見て聊油断やうたうけ
ん虎之助の鎗を請そん〳〵弓手のあぐらへぐさと
突込をとを越前守とをもをを太刀を抜て鎗を切
折〳〵ろ虎之助そのまふろ寄無手と組らまれ
て越前守虎之助を引寄小ふとをにうへける時虎
之助いかの切折たうける鎗を以てかふまうせを
ぐうけるふぞさをろの越前守も心力共ふ疲をて
て終ふ加藤ふ討をたう加藤ハ福島ふをくをつれ
とも詑美ハ河合ふ増る勇士ふをとハ氣色をふてい
よい〳〵先へ進をゆ〳〵是を軍の始とうて片桐助作堀
尾茂助中村孫平次蜂須賀小六同又十郎らつをも

粉骨を盡し働さけるとい朝倉方よりて名あるものの多く討死したりけり爰ゑ氏家左京亮い木下ゑ續いて馳たりけるいまる然るとき敵ゑ合を猶も進て稼さけるゑ落人らとき侍十四五騎馬をとゝめて馳行を見掛ゑるとこそ我得のものと一鞭打て追掛けることい誰と尋ぬるゑ美濃國の齋藤右兵衛大夫龍奥ゑ義景ゑ從ておの年頃越前ゑあり けるとゝ今度も義景ゑ從ひ田神山ゑて出陣をゝか義景俄ゑ田神山の陣を自燒して引退きけるとゝ龍奥もおゝ〳〵引退きけるゑ長井隼人龍奥を呼とめてゆけるゝ人い一代名ゝ末代とゆとあゝ我々

主從美濃國ゑて討死をべきゝける身のいうゑもして再度家を興し本國へ立帰〳〵やとあゝひおの年頃朝倉殿を頼ゑをゝひしゑ今日の体を見とゝゝ朝倉殿も滅亡遠ゆゝしこおゝとれたゝ所詮本望遂る時いゝゝゝ見とゝゝ朝倉家の侍も山崎長門守とゝゝめ名あるものの多く討死したれい朝倉家のいゝゝゝゝとおゝ〳〵めをゆゝてい何とて本國へ御馬を入ゑゑ期あるへけんやたとへゝおの道と道とゑひ名もゑゝさ下手下郎の手ゑゝゝゝ戸と野徑ゑさらさんと口惜ゝゑべし只今競ひゆゝて追來るものゝそ織田家ゑて日頃人のゝゝさ

ふ木下藤吉郎ふるべ〳〵脱とぬ處あり思ひ切て討死ふ〳〵めへさんめり齋藤の名をも腐さとゆふかといさめらと龍奥げふのとおのひ返し只今氏家か馳來るを見て長井と共ゑ馬を立直し聲をもかけぞ突かゝる氏家ゑ兵士二百餘人龍奥主從を真中ゑ取ちめあはせ〳〵とぞ責たゝける長井さゑと目を付て追い誰うとおのひしゑ氏家左京亮敵も多きに汝と打合ことの嬉しさゑ我等ゑ首をい織田殿もさてゑ雑人原とひとつゑふゑぜ〳〵や討取て勲功の賞ゑつのれと呼ろゝ〳〵戰ひけるふ龍奥痛手あまさ処負〳〵ゑ敵の手にかゝらんとい口

惜しいざ自害をべ〳〵とて馬ゑゑ飛下ゑ上帶解をて潔よ〳〵腹めき切てうつふ〳〵にふをは隼人かく〳〵な〳〵收錯し〳〵その〳〵ち我身い氏家ゑ勢ゑ切入て遂ゑゑ〳〵ゑて討死をゑ

七國志ゑ齋藤龍奥ゑ首をゑ氏家ゑ郎等あつけふ宮川但馬といふめの討取しといふ龍奥ゑ道三の孫治部大輔義龍の男長井隼人正道利い道三の弟ゑ元亀二年二月廿八日攝州白井河原ゑ討死をといふ〳〵ゑ戰死といふゑ如何ある

亀さ大德寺芳春院の玉室和尚ゑ隼人の子ゑゑ朝倉孫三郎景健同三郎景紐い敵の中を切ぬけ義

景より追付織田勢手をけ〳〵追来うひ敦賀への本街
道い心元なしゝまづ金ケ崎の城へ入奉らちやとぞ
んどいひしゝ城主攉守道景今夜刀根坂より討と
しかそれもかふひいはゝ疋田の城の梅野三郎
右衛門尉吉仍も討死し山中竪石の城い開て落失
ていは此邊よりて印牧丹後守能俊の木目峠鉢伏の
城〻〻う今よりちらへ〻〻ふある一まづ〻〻と迫落
させあひあら敗軍もまと寄集うひへ〻さて爰より
て一防き防きりて敦賀へ入とあへとやけるにぞ義
景もちきとてくぞ居給ひけるよ織田の城主朝
倉兵庫助景綱い各の軍評定我等ら愚案より落やさ

ひと云とて馬より打のいひくともあく馳てゆく
義景漸〻〻て木目峠を五六騎ととをよ忍ひやう
より落て十三日の暮ひとる敦賀より著あひけう日根
野兄弟い此程竹中と同宿して虎御前山ふあうけ
ふゞ齋藤龍奥定めて朝倉と共より出陣あうひらん
いかふのゝて龍奥ふめらう合これと伴ひうへら
でやとおめひ木下より告て刀根坂の手ふむうひ齋
藤とたつよけとも時あゝして終より目ふめ〻
らひとゆくとるうちふ朝倉方歴く多く討死し
ふと見へ木下う勢首ども手々よさゝけ持て馳返
る中に氏家左京亮う即等宮川但馬守い長井隼人

を見しるして隼人う討とし首を取てうれでめうへに自殺う人あうけるか鎧物具のさくやうあるみううられをも同しく首とうて實撿よ入んかためうしるめうと主の氏家よ見をけるふ氏家一目見てあふあうれやうとこうそ美濃の齋藤右兵衛大夫龍興よ今一川う長井隼人正ふ〳〵とふ聲と聞て日根野兄弟う〳〵と寄ふう口あ〳〵やいうふめして廻う合うとを伴うんと宵ふう辛苦う〳〵とを水の泡とあうけるか此人のためうふそ種々さまく乃艱難とも經うけるふめ〳〵淺ましき体をうるとのうさてさよと諸軍勢の見るめもちぢび聲と

くふちてなうけさけるふそ勇うたのさう〳〵兵士とも兄弟の心中とおもひやう鎧の袖をしぼうけう爰に龍興の最期まて付従ひし即等と氏家う手へ五人迫生捕けるう日根野う面會し龍興う自害をふとふとかうけるふそ備中守も彌次右衛門尉をひうとふけさと増たうけう木下も氏家もまとふ哀とふ思ひしうふそ龍興隼人の骸を日根野兄弟に葬めさせ念頃ふ佛事供養をふしてのち今いおめひ置とふ〳〵うい織田殿ふ仕ふべ〳〵てう〳〵めて出仕とふ〳〵けるとふん

朝倉義景最期の事

并秀吉越前仕置と言上の事

去程より刀根坂の軍破れて越前勢引返しを討死しけるにより織田家の大軍嶮岨き山道ともいとゞ勢猛く追来るを義景疋田木目の城々へも滞て得と田神山へ敦賀まで十一里の処を晝夜へ打てあえぎ〳〵城中へ入るを〳〵く轍の魚の水を待心地して息継ぎたく織田方へ〳〵路次の軍へ打勝首数三千八百餘級を取て城々い金ケ崎疋田山中竪石木目鉢伏を〳〵めいつとも開て明渡し降参しけるみよう十四日の未の刻へ織田の先陣敦賀

にあ〳〵寄たく信長い首ども實検あるて前波九郎兵衛冨田彌六郎等へ姓名を尋ねらるを首帳の式をとゝのくらを一両日軍馬の疲れを休息をゝめ江北へ帰陣あるべしと觸らるけるへ木下藤吉郎大へ驚き御帰陣あらんとゝ何ぞや朝倉滅亡の時節到来して越前一國御手へ入ぬさを捨て帰らをあへへとやある義景これへ一乗谷へ帰り入敗軍と集め兵馬を調練いたくたやすく打亡しのくゆへ〳〵只今敗軍の勢へのり無体へ責付さをゝ〳〵四五日の間へ義景を打取ゆへと勧め奉うけるを信長いらへも秀吉の策をぶしくおもゝる

とゝろ後ゟ浅井長政あらまし淺井をせめ亡して
のち越前ゟ亂入をんと思ふいうゝと宣つゝ秀
吉いやとゝゟ浅井父子ハこゝや籠の中の鳥と同しこと
ゟひたとゝゝを三十日四十日御手あけゆとも何か
との事をゝ仕出しゆべきその上ゟ弟ゝてゆ秀長
に竹中半兵衛をさゝ添虎御前山ゟ備を固く戍ら
を丁野大岳ゟ信忠公御在陣ゟまをゝ少しも御
機遣ひゆゝゝこゝゝ立ゝ勧め奉るゝ信長けゆも
と思召同十八日ゟ敦賀を打立て府中ゟ陣を移さ
と龍門寺ゟ入御あゝ
按ふ義景八月十四日敦賀ゟゝ府中ゟ着十五日

一乗谷へ帰ゝ着十六日己刻一乗谷と落ると云
府中の城ハ朝倉太郎左衛門尉教景の築さゝ処
ゟて此時ハ山崎長門守吉家の城るゝ
然ゟゟ義景一乗谷ゟもたまゝ得を大野郡へ退散
のゝゝ注進ありけるを柴田木下丹羽氏家稲葉安
藤の面々追くゟ一乗谷へと進發を義景敦賀ゟゝ
辛ゝて居城ゟて引退をつゝと共用ゟ立へき一族即
従大ゝゝ打死しけるい義景一人城ゟ入ても何ゝ
をん是全く戰の罪ゟあゝゝ時運の然らしむる所
なゝい義景心閑ゟ自害ゝて果へゝ思ひ定め累代
の重寶共を燒をて四歳ゟる最愛の一子を差ふ

いろさんとなりけるふ一族ありける式部大輔景
鏡をたのめ近侍の寵臣鳥井兵庫助景近そもも理
よひへとも命を全くして再度家を起さと會稽の
恥を雪められんとさそ願くはけと景鏡の居城大
野の亥山と申処も山深く道嶮しく敵寄るともた
やすく攻破ること難ひ晩ることを亥山をさして落られけう大将をてる累
代居住して綺羅錦繡を飾り一乗谷の館ををて
大野の雲の定めかさ亥山の奥へしのひのふと云
程なくあと谷中の老若男女あそさてこと目も
あてられを義景い女子二人あり一人い石山本願

寺顯如上人の長男教如上人へ嫁をんとの約束あ
りしかも乳母夫の福岡石見守これを預りひひく
しく隠しまいらせ石山へ送入しとあり義景一乗
谷より五里の処をやうくその夜戌刻ゑ亥山のふ
ふさなる東雲寺と云山寺へたとりつき平泉寺の
衆徒の心を引見んと消息を送らはしりこもそと
より前ゑ木下藤吉郎信長の仰とて平泉豊原の両
寺へ黄金あまた寄附し且朝倉義景の勅命ゑ背き
し条くをあらてはたて是ゑ因て征伐ある由を告年
来師壇の好そてあくこと一味同心をしめを堂塔伽
藍を破却し僧徒一人も残さず誅とらるくこと旨下

知あうけるふよう平泉寺の衆徒義景の使者來ると
とも對面をはまして消息の答へあも及てば若大
衆蜂起して交山近邊と放火しけるに式部大輔も仰
天し如何をんと周章れ扨又朝倉の家老魚住備後
守景固い中河内口の押えのため府中ゑ止て居と
うけるゑ忽ゑ心變あ嫡子彦三郎を敦賀へ遣て
し人質とゑ信長ゑ降參を朝倉三郎同孫三郎両
人ゑ江北より所々の戰ゑよく働き敵を切拔木目
峠まて義景に從ひうともとてもかくてを叶べ
き軍ゑらばとあめひ切是も同じく降參を信長か
移て稻葉一鉄と朝倉式部大輔と親しきことを聞食

とし〻ゑ稻葉と以て景鏡の許へやされける樣義
景ゑそ勅命を忽緒し天氣ゑ背きたれ朝倉敏景以
來の忠功もあとを一跡を斷絶をしむべきあらば
違勅の惣領と亡して先祖の家名を相續あとと欺
とし〻ゑ景鏡忽ゑ心めくらし十九日の夜ゑ入東
雲寺へ使者を遣らしその許い交山と程遠く何事
の密談もあしめくいい急き今夜山田の庄の六坊
賢松寺へ御座を移されゆくとやを送らしかゑ義景
何の心もつらば小川三郎左衛門尉父子同六郎左
衛門尉加藤新三郎等を供ゑて賢松寺へ引移ゑゑ
ふあくれゑ廿日未刻平泉寺の衆徒を先ゑ立式部

大輔景鏡六坊を取圍ミ平岡次右衛門尉を使ふ
て敵如何よゝて尋知いか多勢よて攻寄ハ今ハ
や御腹めさるゝべしといくをしうも義景大よい
かう景鏡を敵とるゝ已等父子と三年とも
安穏よてあゝしのゝをと高聲よのゝをと一間処
に引入讀經念佛し疊紙ゝ
七顛八倒四十年中無自無他四大本空とゝる
終ゝ
やゝ腹を切高橋ハあきゝ久錯をゝ新三郎いか
きゝか火とかけよと呼れとも高橋新介ハ敵とふ
せき居たゝけるにより義景ゝゝ蠟燭を取障
子ゝ火とさゝもふ処へ高橋新介ゝゝを來ゝ久錯
し聽てその身も腹めき切て死したゝけゝ呼嗚朝
倉敏景入道英林寺宗雄居士ゝのゝこのゝゝ五代の
繁昌たちまちに滅亡しけるぞ是非もあき景鏡い
義景の首取て府中よいゝゝ信長の本陣龍門寺に
參上し事の由を述て降を請しゝゝ義景の首をゝ
都へのわせ獄門ようけ景鏡ゝ不義を惡まれこれも
誅をゝられべしと仰ゝ景鏡ゝ木下藤吉郎諫め奉ゝ
江州ひきゝ落去仕ゝけるを
よ越前國を御あつけあゝて國中平均よ御仕置を仰付
らるゝべし彼等欲心のゝ熾盛ゝて義理を知ぬゝの

共ありといとの川と相争ひ同士打と仕出し自滅仕うゐべし
是災を敵よゆろう幸と得るゝ謀よゆと言上をしうゐ信長
その意をさとうまひあつ最初ゝ降参をし上大嶽を落城せ
しめし忠功あるといとて前波九郎兵衛と桂田播磨守と陂名
して越前の守護とゝ一乗谷ゝとし置き富田彌六
郎長俊とを府中の城主魚住備後守ゝ鳥羽の城主溝江大
炊ゝ金津の城主景鏡ハ元の如く支山の城主とあるゝ
津田九郎次郎木下ゝ左衛門明智十兵衛尉三人を越前の三
奉行として北の庄よのもしあると同廿六日ふゝひ虎
御前山へ帰らをゝ

重修真書太閤記四編巻之廿七終